

平成26年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙は2枚で、答え方はマークシート方式と記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き、さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。
- 7 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 8 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 9 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

塩は生命維持に欠かせない物質である。当然、それは野生動物も同じだ。肉食動物の場合は、エサとなる植食性動物の血や肉から、ある程度の塩分をとることができる。それでは植食性動物はどうするのか。動物は、水を飲む水場のほかに、塩を補給する塩場を知っている。定期的にそこを訪れては塩分を補給している。岩塩を産出する土地ならば、塩の確保はそれほどむずかしくはない。しかし、日本列島を含む世界の多くの地域には岩塩がほとんどない。ところが、日本には温泉がある。温泉のなかには塩分を含むものが相当数あるので、野生動物はそこから生命維持に必要な食塩を手に入れているのかもしれない。

現在、日本の各地で野生動物が里においてくることによる作物や樹木への被害が拡大している。^①その原因のひとつに、塩場の問題があるのではないだろうか。現代に生きる彼らの塩の補給源は、案外、人間なのかもしれない。食べ残しの食料ばかりか、戸外に置きっぱなしの化学肥料や厩肥^{注2}など、塩分を含む物質は里の周囲に、思いのほか豊富にある。寒い地方の道路わきに置かれた融雪剤も、春以降は彼らの格好のターゲットになっている可能性はある。これらはさしずめ、現代における塩場になっているのではないだろうか。もちろん、そんな現代の塩場がいくらかあるとはいっても、野生

動物にとっては塩が貴重であることはいうまでもない。^②かつて旅人たちは山のなかを歩くときに草むらなどに放尿することを戒められていたと、民俗学者の宮本常一は語っている。それは旅人がオオカミと出くわさなかったための戒めであるという。草木の葉についた尿には塩分が含まれる。それが乾くと塩になり、オオカミがそれを舐めにくるといわけだ。いつも同じ場所に塩分があるということになると、オオカミもそれを学習してそこにやってくるようになる。つまり、人間の「道」をオオカミに教えているのと同じことになる。同じ理由で、尿は、底のある甕^{かめ}などに蓄えてはならないとされた。それを狙って、野生動物たちがあらわれるようになるからだ。

動物の身体は生命としての活動を維持するため一定量の塩を必要としている。尿や汗などで排出された分の塩分は、当然体外から補わなければならない。とくに植食性動物の場合にその傾向が強い。^③というのも、あとで述べるように、植物の体内にはカリウムイオンが豊富にあるが、動物体内ではカリウムイオンとナトリウムイオンのバランスがとられていて、カリウムが補給されればその分、ナトリウムも補給しなければならないからである。植物を食べれば食べるほど、塩も必要になるのだ。動物がまさかそうした「栄養学的知識」をもっているはずもなく、彼らは本能に従ってナトリウム、つま

りは食塩を欲する。岩塩などが露頭^{注3}した「塩場」に彼らがあつまるのはそのためである。

肉食性の動物は、植食性の動物の血液などから塩分を補給するの^④でそれほどでもないが、植食性動物にとっては、塩分は水ほどに重要なのである。だから、たとえば遊牧民は、長い旅の途中でキャンプを張るときに、水場とともに塩場を考えてその位置を決める。塩がないところでは、動物のために塩を運ばなければならなかった。

この原則は人にもそのままあてはまる。狩猟採集民は、動物を捕獲するとその内臓や血液から塩分を得ていた。世界には食塩というかたちで塩分をとらない民族があるが、元・国立民族博物館の石毛直道氏によれば、彼らは動物由来の塩で生きながらえているのだという。

遊牧民も塩との強いつながりのなかで生きてきた。狭い、森の多い日本列島に暮らす私たちは、大陸の内部に暮らす彼らがだっ広い草原をあてもなく動き回っているかの印象をもつが、それは誤解^⑤というものだ。彼らは水だけでなく、塩がどこにあるかをきちんと知っている。そしてしばしば、岩塩をとり出して農耕民のもとに運び、ほかの生活必需品と交換していた。^a（彼らは交易の民であった。

（^b）農耕民のように、穀物への依存度が高まると、動物から得ていた塩分が不足となる。（^c）、カリウムとのバランスでナトリウムへの要求が高まる。人間の社会が文明と呼ばれ

る高度なシステムを築き上げるには、ある程度の人口密度を必要とする。（^d）、その高い人口密度を支える食料として、デンブ^⑥ン給源としての穀類への依存度が高くなってゆく。「^I」それにともなつて、塩への要求も高まることになる。「^{II}」石毛氏も、農耕のはじまりが塩分への要求度を高めたのではないかと述べている。「^{III}」単純化していえば、農耕民は古い時代から、塩がもつ正・負双方の側面の狭間^{はざま}で生きてきた、といつてよいと思う。

「^{IV}」

（佐藤洋一郎 ^{さとうよういちろう} 渡邊紹裕 ^{わたなべしゅうひろ} 「塩の文明史」から）

（注1）植食性動物Ⅱ草食動物のこと

（注2）厩肥^{きゅうひ}Ⅱ肥料の一種

（注3）露頭したⅡ地表に表れている

問一 ^① その原因とあるが、その説明として最も適当なものはどれか。

ア 人間の生活する近くでは塩が簡単に手に入ること

イ 日本列島には岩塩がほとんどないこと

ウ 動物は塩を補給する塩場を知っていること

エ 野生動物は温泉から塩分を得ていること

問二 ② かつて旅人たちは……戒められていたとあるが、その説明として適当でないものはどれか。

ア 草木の葉についた尿の塩分がオオカミを呼び寄せてしまうことを教えていたということ

イ 人間の「道」がオオカミの塩場になることを忠告していたということ

ウ オオカミが塩のある場所だと学習してやってくることを防ぐとしたということ

エ オオカミの「道」に塩場を設けることにならないように注意していたということ

問三 ③ その傾向が強い。とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 動物は一定量の塩分を必要としているので、排出された塩分を体外から補わなければならないから

イ 植食性動物はナトリウムを補給しているため、体外からカリウムイオンをとらなくてはならないから

ウ 植食性動物はカリウムイオンを豊富に摂取するため、その分塩分も必要としているから

エ 動物は本能的に「栄養学的知識」を持っているので、塩の必要性を理解しているから

問四 ④ 植食性動物にとっては、塩分は水ほどに重要なのである。とあるが、その理由として適当なものはどれか。

ア 動物を食べない植食性動物は他の動物の血液などから塩分を補給できないから

イ 植食性動物は動物を捕獲できず、狩猟採集民ほどには動物由来の塩を得ることができないから

ウ 遊牧民といっしょに旅をするうちに、植食性動物が自力では塩を得られなくなったから

エ 植食性動物には、水場を確保する以上に塩場を押さえておく必要があったから

問五 ⑤ 誤解とあるが、その内容として適当なものはどれか。

ア 遊牧民が何の目当てもつけずに大陸の内部を動き回っていると思っていること

イ 遊牧民が農耕民のもとに行って塩と生活必需品を交換していると考えること

ウ 遊牧民が日本列島に暮らす私たちと同じような生活をしているとみなしていること

エ 遊牧民が私たちと違って動物由来の塩だけで生きながらえているのだと判断すること

問六 ⑥ 塩への要求も高まることになる。とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 文明と呼ばれるシステムを築き上げるためには人口密度を必要とするから

イ 人口密度を支えるためにはデンブンプン給源として穀類が必要になつてくるから

ウ 穀類への依存度が高くなるにつれて体内のイオンのバランスが崩れるから

エ 遊牧民との交易で必要になる塩の価値が高まっていったから

問七 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア 「a」そして b つまり c いっぽう d さらに

イ 「a」つまり b いっぽう c さらに d そして

ウ 「a」いっぽう b さらに c そして d つまり

エ 「a」さらに b そして c つまり d いっぽう

問八 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」のどこか。適当なものを後から選べ。

同時に、農地の塩はしばしば塩害という、人間にとって負の現象を起こしてきた。

ア「Ⅰ」 イ「Ⅱ」 ウ「Ⅲ」 エ「Ⅳ」

問九 本文中で述べられている内容として適当なものはどれか。

ア 肉食動物や狩猟採集民は捕食する動物の血や肉から塩分を得るため、補給源を他に頼る必要がない。

イ 塩は動物にとつて不可欠な物質であり、人間や動物は何らかの方法でもつて塩分を得る工夫をしている。

ウ 体内のカリウムイオンとナトリウムイオンのバランスは肉食動物と植食性動物で違う。

エ 塩がもつ負の側面は人間が文明を築き上げることをしばしば妨げてきた。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注1)
サナトリウムで療養生活を送る婚約者の「節子」に付き添っている「私」は、二人だけの生活にこれ以上ない幸福を感じて日々を過ごしている。

夕方、私達は二人きりでいた。附添看護婦はいましたが食事に行った。冬の日には既に西方の山の背にはいりかけていた。そしてその傾いた日ざしが、(a) 底冷えのしだした部屋の中を急に明るくさせ出した。私は病人の枕もとで、ヒーターに足を載せながら、手にした本の上に身を屈めていた。そのとき病人が不意に、「あら、お父様」とかすかに叫んだ。

私は (b) ぎくりとしながら彼女の方へ頭を上げた。私は彼女の目がいつになく輝いているのを認めた。——しかし私は (c) 今の小さな叫びが耳に入らなかったらしい様子を見ながら、

「いま何か言ったかい？」と訊いて見た。

彼女はしばらく返事をしないでいた。が、その目は一層輝き出しそうに見えた。

「あの低い山の左の端に、すこし日のあたたつた所があるでしょ？」彼女は (c) 思い切ったようにベッドから手でその

方をちよつと指さして、それから何だか言いにくそうな言葉を無理にそこから引き出しでもするように、その指先を今度は自分の口へあてがいがながら、「あそこにお父様の横顔にそっくりな影が、いま時分になると、いつも出来るのよ。……ほら、ちようどいま出来ているのが分からない？」

その低い山が彼女の言っている山であるらしいのは、その指先を辿りながら私にもすぐ分かったが、ただそこいらへんには斜めな日の光がくつきりと浮き立たせている山巒しか私には認められなかった。「 I 」

「もう消えて行くわ……ああ、まだ額のところだけ残っている……」
そのときやつと私はその父の額らしい山巒を認めることが出来た。それは父のがつしりとした額を私にも思い出させた。「こんな影にまで、こいつは心の裡で父を求めていたのだろうか？ああ、こいつはまだ全身で父を感じている、父を呼んでいる……」

が、一瞬間の後には、闇がその低い山をすっかり満たしてしまった。そしてすべての影は消えてしまった。

「お前、家へ帰りたいのだろうか？」私はいと心に浮かんだ最初の言葉を思わずも口に出した。「 II 」彼女は(注2) 目つきで私を見つめ返していたが、(d) その目を反らせながら、

「ええ、なんだか帰りたくなっちゃったわ」と聞こえるか聞こえない位な、かすれた声で言った。

② 私は唇を噛んだまま、目立たないようにベッドの側を離れて、窓ぎわの方へ歩み寄った。「Ⅲ」私の背後で彼女が少し顫声で言った。「御免なさいね。……だけど、いまちよっとの間だけだわ。……こんな気持ち、じきに直るわ……」

私は窓のところに両手を組んだまま、言葉もなく立っていた。山々の麓にはもう闇が塊まっていた。しかし山頂にはまだ幽かに光が漂っていた。③ 突然咽をしめつけられるような恐怖が私を襲ってきた。私はいきなり病人の方をふり向いた。彼女は両手で顔を押しさえていた。④ 急に何もかもが自分達から失われて行ってしまいそうな、不安な気持ちでいつばいになりながら、私はベッドに駆けよつて、その手を彼女の顔から無理に除けた。「Ⅳ」彼女は私に抗おうとしなかった。

高いほどな額、もう静かな光さえ見せている目、引きしまった口もと、——何一ついつもと少しも変わってはず、いつもよりかもつともっと犯し難いように私には思われた。……そうして私は何でもないのにそんなに怯え切っている私自信を反つて子供のようにならずにはいられなかった。⑤ 私はそれから急に力が抜けてしまったようになつて、がつくりと膝を突いて、ベッドの縁に顔を埋めた。そうしてそのままいつまでもびったりとそれに顔を押しつけていた。病人の手が私の髪の毛を軽く撫でているのを感じながら……

⑥ 部屋の中までもう薄暗くなっていた。

(堀辰雄「風立ちぬ」から)

(注1) サナトリウムⅡ長期療養を必要とする人のための療養所
(注2) すぎないようなⅡ突き放すような

問一 (a) から (d) に入る語の組み合わせと

して適当なものはどれか。

- | | | | | |
|---|---------|-------|--------|--------|
| ア | 「a 思わず | b 急に | c やつと | d だんだん |
| イ | 「a だんだん | b 思わず | c やつと | d 急に |
| ウ | 「a 急に | b 思わず | c だんだん | d やつと |
| エ | 「a やつと | b 急に | c だんだん | d 思わず |

問二 に入る語として最も適当なものはどれか。

- | | |
|---|----------|
| ア | わびしように |
| イ | けだるそうに |
| ウ | すまなそうに |
| エ | さりげなさそうに |

問三 ① 何だか………するように、とあるが、「彼女」がそのような様子

子でいる理由として適当なものはどれか。

ア 婚約者が入院して頭が混乱している「私」に何を言っても理解してもらえないことが予測できたから

イ 耐え難い療養生活を終わりにしたいという気持ちを「私」に伝えなければならぬと焦っているから

ウ 父親に会いたいという本心が分かかってしまうような話題を婚約者である「私」の前で出すのがためらわれたから

エ 山の影が父親に見えるなどと幼いことを言っても「私」にはばかにされることが分かっていたから

問四 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」

のどこか。適当なものを後から選べ。

そのあとですぐ私は不安そうに節子の目を求めた。

ア 「Ⅰ」 **イ** 「Ⅱ」 **ウ** 「Ⅲ」 **エ** 「Ⅳ」

問五 ② 私は唇を噛んだまま、とあるが、「私」がそのような様子でい

る理由として適当なものはどれか。

ア 「節子」に家のことを思い出させるような質問をしたことを後悔したから

イ この先もずっと「節子」の看病をしながら生活することを考えると胸が苦しくなったから

ウ 「節子」が、自分よりも「父」を求めていることにもどかしさを覚えたから

エ 家に帰りたいたいと言って周囲を困らせる「節子」のわがままな態度に腹が立ったから

問六 ③ 突然………襲ってきた。とあるが、その説明として適当なもの

はどれか。

ア 自分と「節子」との穏やかな生活が失われるかもしれないという悪い予感がしたこと

イ 「節子」の死後一人ぼっちになってしまふ寂しさがこみ上げてきたということ

ウ 「節子」が自分よりも「父」を信頼していることへの嫌悪感がわいてきたということ

エ 気弱になっている「節子」に何もしてあげられないという無力感に陥ったということ

問七 ④ 急にが直接かかる部分は、本文中の〰〰線アからエのどれか。

- ア 失われて行つて
イ いっぱいになり
ウ 駆けよつて
エ 除けた

問八 ⑤ 私は……顔を埋めた。とあるが、その時の「私」の様子として適当なものはどれか。

- ア 込み上げる感情を抑えきれずに「節子」を驚かすような行動をとってしまったことを反省し、謝りたい気持ちでいっぱいになっている。
イ それまでは「節子」の支えとなってきたつもりであったが、逆に自分が「節子」に支えられていたことを知り、すぎるような思いになっている。
ウ 自分の生活を犠牲にしてまで「節子」に尽くしてきたが、「節子」の態度から自分の愛情が届いていないことを知り、やるせない気持ちになっている。
エ 「節子」に死が迫ってきていることを感じながら生活していたが、「節子」の穏やかな表情から病気が落ち着いていることが分かり、安心している。

問九 ⑥ 部屋の中までもう薄暗くなっていた。とあるが、この表現に象徴されているものとして最も適当なものはどれか。

- ア 「節子」を支えなければならぬ立場であるはずなのに、逆に自分の方が精神的に不安定になってしまい、申し訳なく思う「私」の心を象徴している。
イ 「節子」の父親を、「節子」と二人だけの生活で生まれる幸せを壊そうとする恐ろしい存在に感じて、おびえている「私」の心を象徴している。
ウ 心までも病んでいる「節子」を見て、サナトリウムでの療養生活を決心したことを後悔するとともに、絶望感に打ちひしがれている「私」の重々しい心の様子が象徴されている。
エ 「節子」にできるだけの看病を続けてきた「私」ではあるが、その願いもかなうことなく「節子」との二人だけの生活が終わってしまうことを象徴している。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(醍醐天皇ノ御治世ノ時ニ、『古今集』ヲ選定ナサツタ時) (注1)
 延喜の御時に、『古今』抄ぜられし折、貫之はさらなり、忠岑
 や躬恒などは、御書所に召されて候ひけるほどに、四月二日なり
 しかば、まだ忍び音のころにて、いみじく興じおはします。貫之
 召し出でて、歌つかうまつらしめたまへり。
 (他ノ夏ハナシテ風ニ鳴イテイタダロウカ、ホトトギスヨ、今夜ホト心ヒカレタコトハ) (注2)

こと夏はいかが鳴きけむ時鳥この宵ばかりあやしきぞなき
 それをだに、(b)「けやけき」ことに思ひたまへしに、(c)「同じ御時、御遊び
 ありし夜、躬恒を召して、「月を弓張といふ心は、何の心ぞ。こ
 れがよしつかうまつれ」と仰せごとありしかば、
 照る月を弓張としもいふことは山辺をさしていればなりけり
 と申したるを、いみじう感ぜさせたまひて、(d)「大桂賜ふ」。

(注1) 貫之の「紀貫之」。平安時代の歌人で『古今集』の編者
 (注2) 忠岑や躬恒は壬生忠岑や凡河内躬恒。平安時代の歌人

問一

(a) いみじく、(b) けやけきの本文中での意味はそれぞれどれか。
 (1) いみじく

- ア 樂しげに
 ウ 積極的(ke)に
 (2) けやけき
 ア 際立(き)ってすばらしい
 ウ 思いのほか物足りない
 イ 意外に気が利(き)いている
 エ ひどくしゃくにさわる

問二 ① さらなり、に込められた語り手の気持ちとして最も適当なものはどれか。

- ア 『古今和歌集』は平安時代を代表する和歌集である。
 イ 平安時代の歌人の中で最も優れているのは「貫之」だろう。
 ウ 「忠岑や躬恒」ほど歌人としての「貫之」は評価できない。
 エ 『古今和歌集』の中心的編者は「貫之」であろう。

問三 ② なぎの活用形はどれか。

- ア 終止形 イ 命令形 ウ 連体形 エ 已然形

問四 ③ 同じ御時、とあるが、いつを指しているか。次から選べ。

- ア 『古今』抄ぜられし折 イ 四月二日
 ウ 忍び音のころ エ 夏

問五 ④ 「大桂賜ふ」とあるが、その理由として適当でないものはどれか。

- ア 「躬恒」の和歌の「さしていれば」の掛詞に感心したから
 イ 質問に対する「躬恒」の返答の機転に感動したから
 ウ 「躬恒」の和歌が「貫之」の和歌よりも優れていたから
 エ 即興で詠んだ「躬恒」の和歌が上出来だったから

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

幸田露伴^(注1)の『五重塔』は、名人気質^{かたぎ}の頑固な大工が五重塔を独力で建てる物語。心魂を傾けた塔は落成式を前に大暴風雨に見舞われるが、嵐が去ると「一寸一分歪み^{ゆがみ}もせず」に見事に立っていた。工事中に東日本大震災に耐えた東京スカイツリーと、どこか重なり合う▼地震の一週間後には高さが634メートルに届いた。日本中が騒然、暗然となるなかで、^①ともしびのような話題^(a)だった。聞けば耐震性を高める設計は、デントウ建築の五重塔の知恵を生かしているのだという▼「心柱」と呼ばれる柱が、五重塔の中心を貫いている。似た構造をツリーも持つ。地震だけでなく、瞬間風速が毎秒110メートルという超暴風も想定しているそうだ。ツリーの地元で長く暮らした露伴翁^(注2)は、天上で満悦なことだろう▼着工から完成へ、淡々かつ黙々と空へ伸びていった。を煎じて政治家に飲ませたくなるようなプロの仕事ぶりだ。基礎工事ははじめ照明や塗装、アンテナなどまで、ソウミ^(d)が日本の最新技術の結晶という。ものづくりの底力を思うと、じんときくる▼設計に際しては「威圧感^(b)をもたせないようにした」そうだ。巨大建築は往々に国威や権勢を誇り、象徴する。^④それをすらりと脱ぎ捨てた「雅」と「粹」は江戸の下町によく似合う。

(朝日新聞「天声人語」から)

(注1) 幸田露伴^{こうだろはん} 明治から昭和にかけて活躍した文豪
(注2) 翁^{おうち} 高年の男性に敬意を込めた表現

問一 独力^(a)、貫^(c)の読みをひらがなで書きなさい。ただし、送り仮名は不要とする。

問二 デントウ^(b)、ソウミ^(d)を漢字で書きなさい。

問三 ともしびのような話題^(a)にみられる表現技法を何と呼ぶか。漢字で答えなさい。

問四 伸びていった^(b)の主語を本文中の言葉で答えなさい。

問五 に入る語句をひらがな五字で答えなさい。

問六 もたせ^(b)の活用形を漢字で答えなさい。

問七 ^(c)それが指しているものを本文中から抜き出しなさい。